

美術史学専攻（博士後期課程）

1. 教育研究上の目的

美術史学専攻は、美術史に関する高度な専門知識を修得し、分析能力や論述力を錬磨するとともに最先端の研究成果やこれまでの研究蓄積への理解を深め、自ら設定した研究課題に相応しい研究方法を探求して専門的な考究をなし、その過程や結果を論理的かつ創造的に報告できる人材を養成する。

2. 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

美術史学専攻（博士後期課程）では、履修規定に即して必要単位を修得し、必要な修業年限を満たした上で、下記の能力を備えていると判断した場合に、「博士（美術史学）」の学位を授与します。

（知識・技能）

1. 美術史についての自立した専門的研究活動を独自に遂行する能力と高度専門職業人としてふさわしい高度な専門知識を修得している。

（思考・判断・表現）

2. 美術史の様々な課題について、高度で専門的な知見によって考究し、その過程や結果を論文・レポート・プレゼンテーションなどを通して論理的・創造的に報告、表現することができる。

（関心・意欲・態度）

3. 明確な問題意識に基づき、自身で目標を設定し、その研究課題を自身で追及していくように取り組むことができる。

3. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

美術史学専攻（博士後期課程）では、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げた能力を修得させるために、以下のような内容、方法等に基づき、カリキュラムを体系的に編成します。

（教育内容）

1. 学術論文執筆に要求される分析能力と論述力を錬磨し、自ら設定した研究課題に対する研究方法の確認や調査成果発表のプレゼンテーションスキルの向上を通して、博士論文作成を目指すため、「日本東洋美術史演習」「西洋美術史演習」「芸術学演習」を配置する。（思考・判断・表現）
2. 博士論文作成に必要な専門知識を幅広く身につけ、最先端の研究成果やこれまでの研

究蓄積への理解を深め、自ら設定した研究課題に相応しい研究方法を探求するために、「日本東洋美術史特殊研究」「西洋美術史特殊研究」を配置する。(知識・技能／思考・判断・表現)

3. 美術館、博物館の歴史の変遷や意義、現代社会での位置づけや機能など美術館・博物館に関する理解を深めるとともに、現代の美術館・博物館における実践的知識や技能を修得し、学芸業務への意欲や関心を育てるために、「美術館学特殊研究」を配置する。(知識・技能／関心・意欲・態度)
4. 学生が博士論文の作成について必要な知識や技能を修得できるように、「博士論文指導」を必修科目として配置する。(知識・技能／思考・判断・表現)

(教育方法)

1. 講義科目では、最先端の研究動向とその成果に目配りした幅広い知識を修得させることを目的として、講義法を採用する。
2. 演習科目では、学生自身のプレゼンテーション及び論文作成能力を向上させるため、アクティブ・ラーニングを取り入れた演習を採用する。
3. 指導教授が、きめ細かな研究指導や論文執筆・発表の指導を行う。
4. 各自の研究課題に寄り添った実作品や資料の調査を支援し、新しい知見と解析を可能とするため、随時、作品及び資料の現地調査のフィールドワークを行う。

(教育評価)

1. 知識・技能の修得に関しては、博士論文による研究成果の審査を通じて評価する。なお、その審査にあたっては、別に定める審査基準に基づいて、総合的に判断する。
2. 講義科目において、具体的な問題に関する報告及び討論を行うなかで、論理的かつ科学的な説明を行う能力、十分に根拠づけられた説得的な議論を構築する能力、及び他者との議論の中で妥当な結論を導いていく能力を測る。
3. 指導教授による演習科目において、自らの知識と思考を用いて具体的な問題を検討し、解決しようとする姿勢と能力を測る。そして、博士論文の審査を通じて、より専門的な学問的能力についての評価を行う。

4. 入学者受入れの方針 (アドミッション・ポリシー)

美術史学専攻 (博士後期課程) では、次に掲げる知識・能力や目的意識・意欲を備えた学生を、各種選抜試験を通じて受け入れます。

(知識・技能)

1. 自らの研究領域についての高度な専門的知識と研究資料の講読に必要な外国語能力を有している。

(思考・判断・表現)

2. 博士前期課程における専門的な研究を踏まえ、独創的な学術的思考を展開することができる。

(関心・意欲・態度)

3. 自発的に諸問題へ関心を持ち、その関心をより深めるために学問、調査、研究に主体的に取り組む意欲がある。

以 上